
魔法生物研究会！

山川四季

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法生物研究会！

【Nコード】

N2900W

【作者名】

山川四季

【あらすじ】

念願の、歴史ある「コセキ総合大学」への留学を果たしたセイシヨウ。彼は学費も生活費も自分で稼がねばならない苦学生だった。勉強とバイト以外には脇目もふらない予定……だったのだが、彼を取り巻く学友たちがそれを許さなかった！

入学当日・1

学術国家オート。そこは純粹に学問を究めたいと願う者にとって、正に聖地とも言つべき場所。

野心と熱意を抱いた探究者たちは、更なる深みを目指してこの国へと集まってくる。

オートが統括する研究機関に留学する際、求められる条件は2つだけ。

1、宗教・思想の自由は認められるが、司法制度はオート固有のものに従つこと。

2、出身国の階級制度による身分差別、および経済格差による差別意識を持つ者は入国を禁ず。

留学生らは入国管理局で、この誓約書にサインした時点で晴れてオートの市民権を得るのである。

季節は水。全ての始まりを意味するこの季節に、各研究機関の入学式が行われる。

オート南方の都市アイヒに存在する、歴史ある学術研究所「コセキ総合大学」でも、期待に顔を輝かせた新入生たちが無事に入学式を終えたところだった。

大学内での生活は基本的に生徒たちの自主性に任されている。大学側からの講義を受けるか強要されることもないし、どの研究室であつても出入り自由だ。

新入生のある者は入学式を終えてすぐ、興味のある分野の講義に顔を出した。またある者は翌日から気合を入れて学問に取り組みために、早めに下宿に戻って休むことにした。

そして今。大学内の静まり返った廊下に佇んで、途方に暮れている新入生がいた。

「……どこだこは」

明るい茶色の髪をした少年は、やや童顔のその顔に困惑の表情を浮かべて呟いた。

彼は名をセイショウという。他国からの留学生だ。

コセキ総合大学の建物は、長い歴史を経て非常に味わい深い趣をたたえている。セイショウが今いる廊下も高い高いガラス張りの天井に魔法がかけられており、上空から降り注ぐ日光が七色に揺らめいていた。

大学内の探検をしていたセイショウは、その神秘的な光景に口をポカンと開けたまま上を見上げて歩き続け……気づけば人の気配が全くない場所へと入り込んでしまったのだ。

彼は今、大学の案内所で地図をもらってこなかったことを激しく後悔していた。

殺風景な壁には出入り口も窓もなく、今居る場所のヒントになりそうなものは見当たらない。

通りすがりの人間を捕まえようにも、仔ブタ1匹通らない。

「……とりあえず座ろう」

こみ上げてくる不安感から現実逃避するため、セイショウは壁にもたれかかるとズルズルと床に座り込んだ。

ふーっと勢いの良い溜息をつく。しばらく休んで気力を回復したら、何か良い案が浮かぶかもしれない。少なくとも、また歩き出すための体力は回復できる。

両ひざを立て、その上に手を乗せたセイショウは、自分のつま先で七色の光が水面みなものように揺らめいているのを、見るとはなしにポーツと眺めていた。

不意にその光が消え、周囲が暗闇に包まれる。

（なんだ？）

首を捻じ曲げて上空を見上げたセイショウは、驚きに目を見開いた。

何かフワフワとした白い毛に覆われた2匹の巨大な生物が、ゆっくりと天井近くを飛んでいる。

セイシヨウは慌ててその影から抜け出ると、改めて彼らの全身を
目にして「うわぁ……」と声を上げた。

縦に並んだ2匹の謎の生き物は、滑るように空中を横切って行く。
風にたなびく長い毛は、日の光を浴びて銀色に輝いていた。

その雄大さと美しさだけでも十分に感動的だったが、セイシヨウ
が目を瞞ったのは、また別のものが持つ美しさだった。

後方を飛んでいる生き物は、背中に人を乗せていた。高度が高い
のでハッキリとは分らないが、どうやら女性であるらしい。

その人物は長い長いストロベリーブロンドの髪を束ねもせず、風
になびかせるがままにしていた。

光輝く銀色と赤毛のコントラストに、思わず感嘆の声を上げてし
まったのだ。

その場に立ち尽くしたまま、じっと彼らの様子を見つめるセイシ
ヨウ。

すると彼の視線に気づいたのか、謎の生き物の背中に乗っていた
女性が下を見下ろし、自分を見上げている少年の存在に気がついた。
彼女の顔に「しまった」という表情が浮かぶ。

地上に居るセイシヨウからは顔の動きを確認することは出来なか
ったが、それでも女性のまとう雰囲気が変わったことは分かった。

彼女が何やら合図をすると、2匹の生物は動きを止め、空中に静
止した。

「……………」
女性の視線が自分に注がれているのを感じ、身動きせずじっと
見つめ返すセイシヨウ。

だがそのまま3分も経つと、さすがに居心地が悪くなってくる。
何か声をかけた方がいいのだろうか、とセイシヨウが迷い始めた
頃だった。

彼と同じように身じろぎもしなかった女性が、急に身を屈めて自
分の乗っていた生き物の身体を撫でた。

それに応えるように謎の生物がゆっくりと動き始め。

「うえええええっ?!」

一直線にセイショウに向かって急降下してきた!

何が起こっているか分からないものの、このままでは確実に衝突する。

セイショウは悲鳴を上げると、身を翻して走り出した。

だが生き物は空中を泳ぐスピードをアップさせて、ぐんぐんと彼との距離を縮めて行く。

必死に走りながら肩越しに振り返ったセイショウは、自分のすぐ後ろで大きく広げられた生き物の口の中に鋭い牙が並んでいるのを見て、真っ青になった。

今まで以上に身体を前傾させると、限界まで足の回転数を上げ、迫りくる恐怖から逃れようとする。

だがその努力も空しく。

「うわっ、うわっ、わああああああっ!」

ばかりと啜えられたセイショウは、そのまま上空へと連れ去られた。

目が回りそうなほどの急激な高度の変化と、全身に感じる風圧。そして肉食獣並みの牙を持つ生物に啜えられているという恐怖。

彼が気を失うまで、長い時間はかからなかった。

(ああ、夢だったんだ……)

浮上してきた意識の底で、セイショウはぼんやりと思った。

突然、怪物に襲われて連れ去られる夢を見るなんて、まったくうかしている。突拍子もない夢を見るのは、別に珍しいことではないけれど。

目を閉じたまま苦笑して、寝返りを打つ。フカフカとした心地よい寝具が、セイショウの体重を受け止めて柔らかく沈んだ。

「……？」

その感触に違和感を覚え、セイショウは手で寝具を撫でまわした。手触りが滑らかで、温かく弾力がある。おかしい。こんな上質な寝具のある下宿に滞在できるほど、自分に財力は無い。おまけに、何だか上下しているような……？

このまま安眠に身を委ねていたいという欲求を抑え込み、目を開けたセイショウは、声にならない悲鳴を上げた。

自分を連れ去った怪物の顔が、どアップで視界に飛び込んできたのだ。瞬間的に身体中の毛穴から冷や汗が吹き出し、もちろん眠気など跡形もなく吹き飛んでいた。

じっと見つめてくる黒い巨大な瞳から目をそらすこともできないまま、セイショウは自分の置かれている状況を理解した。なんと彼は、この巨大な生物の腹を枕にして眠っていたのだ。そして怪物は、首を巡らせてセイショウを見つめながら、穏やかに呼吸をしていた。(一体なぜこんなことに?!)

滝のような汗をたらたらと流しながら、緊張で身を固くするセイショウ。

すると怪物は、目を細めて「くるるる……」と小さな音で喉を鳴らした。

「ああ、気がついたのか？」

声とともに、ひんやりする手がセイショウの頬に当てられた。かがみこんで彼の様子を伺っているのは、あのストロベリーブロードの髪の女性だ。

彼女の長い髪が垂れ下がり、怪物からの視線を遮ってくれたことに、思わず安堵のため息をつくセイショウ。女性は掌を彼の額に移動させて、表情を曇らせた。

「寝汗をかいているな……無理もない。今日は暑いからな」

(ちがぁーう！)

断じて違う。寝汗じゃない、冷や汗だ。と言うかこの状況を説明してくれ！

心の中で色々突っ込みを入れるセイショウだが、心配そうなペールブルーの瞳に見下ろされると、口に出すことは出来なかった。

「今日はそんなに暑くないぜ？」

背後から聞こえた男の声に、女性はセイショウの側にかがみこんだまま声の主を振り返った。

セイショウも目だけ動かしてそちらを見る。がっしりとした身体つきの男が、長い脚を組んで椅子に座っていた。口調も表情も、どこか皮肉っぽい雰囲気なたたえた男だ。

「そうか？」

「ああ。だがそのまま、もふもふの腹の上に居たら暑くなるだろうけどな」

「それはそうだ」

女性は男の言葉に頷くと、セイショウに手を差し出した。

(もふもふ？)

疑問に思いながらも、その手を借りて身体を起こすセイショウ。向かい合って立ってみると、女性はセイショウよりも背が高く、見下ろされる形になった。

「ありがとうございます。あの……」

何がどうなっているのか知りたい。けれど、どうやって話を切り出せば良いのだろうか。

(この怪物に僕を襲わせませんでしたか? ……まさかね)
セイシヨウが悩んでいると、女性は彼の手を握ったままニッコリと笑った。

「私はベル・クインだ。よろしく」

「あ、はあ。よろしく」

「俺はソル。狩猟担当だ。よろしくな、セイシヨウ」

「え。なんで僕の名前……」

なにやら不可解な単語があつたような気がするが、それよりも、この男が自分の名前を知っていることの方が気になる。

「ああ。ちよつと借りたぜ。入部届に名前を書くためにな」

ぽーんとソルが投げてよこしたものは、今日もらったばかりの学生証だつた。慌ててそれをキャッチするセイシヨウ。

「入部届?」

ソルは椅子から立ち上がると、怪訝な顔のセイシヨウの目の前で、持っていた羊皮紙を広げて見せた。セイシヨウは一番上に書かれた大きな文字を、声に出して読む。

「魔法生物研究会……」

「そう。今日からお前は新入部員だ」

「はあ?」

要領の得ない顔で、セイシヨウがソルを見上げる。

「僕、入部するなんて一言も言つてませんけど」

「仕方ねーんだよ。もふもふがお前のこと気にいつちまったから、がりがりど頭をかきながら、面倒くさそうにソルが言った。その傍らに立つベルが、真面目な顔で頷きながら口を開く。

「正確に言つと、もふりーなの方だ」

「あの、何ですか? もふもふ……もふりーな?」

セイシヨウがそう言つと、返事をするかのように、甲高い「きゅるるるっ」という声が聞こえた。振り向くと先ほどの獣が、仰向けになって床に身体をこすりつけている。

「見る。もふりーなもあんなに喜んでいる」

「俺には見分けがつかねーんだよ」

嬉しそうに指をさすベルに、ソルが呆れたような顔を向けて言った。

察する所、あれが「もふりーな」という生き物らしい。この2人の会話から、どうやら自分がこの獣に気に入られたらしいことが分かるが、だからと言ってなぜ入部につながるのだろうか。

「ああ、悪い悪い」

何か言いたそうなセイショウの顔に気づいたソルが、軽い口調で謝りながら向き直った。

「あー……要するにだな、ここに居るベルが」クイツと親指でベルを指す。「もふもふ達に乗ってる所を見られるのは、非常にマズイことなんだ。で、秘密を守ってもらうために、この部に入ってもらおうっつーわけ」

ベルも頷きながら説明に加わる。

「最初ももふもふに頼んで、君の記憶を消そうとしたのだ。しかし、もふりーなが反対してな。いきなり君の捕獲に走ったのだ。……私の命令をもふりーなが聞かないなんて、初めてのことだった。君はよほど気に入られたらしいな」

口調は穏やかだが、シヨックを受けたことを隠しきれていない。微笑みを浮かべてはいるが、「記憶を消そうとした」の辺りで、目が不穩に光ったのを見逃さなかったセイショウは、思わず逃げ腰になった。

「しっかし恐怖のあまり失禁しなくて良かったぜ。野郎のズボンなんて脱がしたくないからな」

にやりと口の端を歪めて、からかうようにソルが言った。むっとするセイショウだったが、話をはぐらかれそうになっていることに気づいて、慌てて自分を落ち着かせる。

「それだったら別に入部しなくても……僕、誰にも言いませんよ」

「『憂いの種を1つでも残しておけば、いつの間にか成長した蔓に絞め殺される』。兵法の基本だな」

あごの無精ひげを撫でながら、ソルが古典を引用した。その意外な知性にセイショウは驚きの声を上げる。

「あんた……ひよつとして学生だったの catt?！」

「何だそれは。俺を何だと思ってた。つーかお前、いきなりキャラが変わったな！それが本性か！」

「ただのチンピラか、金で雇われた傭兵だと思ってたよ！」

「てめえ、魔法戦士様を捕まえて失敬な！」

「魔法戦士い?!」

セイショウの声が裏返った。

魔法戦士と言えば知性と教養、そして魔力を兼ね備えた存在だ。

肉弾戦で戦うことはなく、知力と魔法で戦況を覆す頭脳派戦士。つまりインテリジェンス中のインテリジェンス。

しかし目の前の男は、がちがちの「肉体労働！」な身体つき。粗野で乱暴な口調といい、どう見ても胡散臭い外見といい、傭兵にしか見えない。

セイショウの中で魔法戦士に対するイメージがガラガラと音を立てて崩れ落ちた。

がつくりと肩を落としたセイショウの背中を、まあまあとベルが慰めるように撫でる。

「そう気を落とすな。信じられないだろうが、確かにソルは魔法戦士だ。それも優秀な。……信じられないだろうが」

「おいこら。何で2回繰り返した」

ソルの睨みつける視線を無視して、ベルは話を続ける。

「私たちは君を信用していないわけじゃないんだが……もふもふが、どうしても君を目の届くところに置いておきたいというのだ」

「もふもふが……?」

顔を上げたセイショウに、ベルが頷いた。

ちらりと視線を背後にやると、白い毛の獣はすやすやと気持ち良さそうに眠っている。

「あれはもふりーなだ。実は、もふりーながあまりにも君を気に入

ったものだから……その……もふもふが嫉妬してな。もふりーはもふりーなで君を手放したくないと言うし、もふもふは君を監視したいと言うし……」

言いにくそうに続けられた言葉に、セイショウは頭を抱えて脱力した。

獣に気に入られて、更に嫉妬までされる僕って一体……。

(監視なんかしなくなつて、獣相手に何をするって言っただ!)

「まあ、そんな経緯いきさつなんだが。私たちとしては仲間が増えるのは大歓迎だ。君が入部してくれたら嬉しいよ」

にこり、と微笑むベル。だがセイショウは、その笑顔に騙されはしなかった。

「……そもそも貴女があんな迂闊に飛び回ってたせいじゃないですか」

びし、とベルの笑顔が凍りつく。

「その通りだ。普段から気をつけるように言ってるんだがな。こいつ、移動が面倒くさいとか言ってる聞きやしねえんだ」

ソルがベルの頭を、拳でこづいた。

「し……しかし！ 今まではちゃんと目撃者の記憶を消していたのだから、問題ないだろう」

「……で？ 今回、例外が発生して面倒くさい事態になったわけだ」「うっ……」

顎を上げたソルに見下ろされ、言葉につまるベル。

彼女を初めて見た時は人間離れた神々しさまで感じたものだが、こうして地上で改めて見ると、意外と子供っぽい人だなとセイショウは思った。

ソルは明らかにベルをいじめて遊んでいる。2人の間に漂う雰囲気から察するに、こんなやり取りは日常茶飯事なんだろう。

「言つときますけど、僕、クラブ活動なんかしている暇ないですよ。学費も生活費も稼がなきゃいけないんですから」

このままでは自分の存在を忘れ去られそうだと思ったセイショウ

が、慚然とした表情でソルに言った。

1年分の学費を貯めて留学してきたが、生活費は自分で稼がなければならぬ。もし1年後に、まだ勉強を続けたいという気になった時のために、そこから先の学費も備えておかねばならぬだろう。叔母を頼ればポンと全ての費用を出してくれるだろうが、それだけはしたくなかった。

コセキへの留学が認められた時から、勉強とバイト以外はしない覚悟だ。たとえ謎の生物に好かれたからと言って、それは変わらない。

「そんなわけで入部はお断りします」

「金になるぞ、うちの部は」

ペこりと頭を下げて、さっさと戸口に向かって歩き出したセイシヨウは、ぼそりとソルが呟いた一言を聞いて動きを止めた。

「そんじょそこのバイトじゃ稼げないぐらいの金が入るんだがなあ。しかも、どんな仕事よりも効率的に稼げるぞ。学費も生活費もすぐ貯まる」

首だけ巡らせて、ソルを凝視するセイシヨウ。ソルは何気なさを装って彼に近づくと、1冊のノートを広げた。

「ちなみにこれが、今年のこの部の収益だ」

「……！」

そこに書かれた金額に、目を瞠るセイシヨウ。この部に何人の部員が居るか知らないけれど、全員で分けたとしても、かなりの金額になることは間違いなかった。

「で、どうする？ お前の入部届はまだここにある」

「……性格悪いですね」

フンと笑うソルを上目使いで睨みつけた後、セイシヨウは苦々しげな顔で視線を逸らさずため息をついた。

「……分かりました。入部しますよ」

「え、入るのか？」

間の抜けた声を上げたのはベルだった。

「さつき歓迎するとか言つてませんでしたか？」

「ああ、まあ、そうなんだが……」

呆れたようにセイショウが言うと、ベルは言葉を濁して視線を彷徨わせた。明らかにセイショウの返事は予想外だった様子だ。

「その……活動内容も知らないのに簡単に決めたから、驚いてな」

「金のためなら大抵の困難は乗り越えられる、がモットーですから」

「良い性格してるな」

ソルが収支報告ノートで顔をパタパタと扇ぎながら笑った。

「じゃあ、お前が会計担当な。今までは俺が兼任してたんだけどよ。助かるわー。俺、こういう細かい作業が苦手なんだよな」

「でしょうね」

「あ？」

「何でもないです。……で、どういう活動なんですか？」

セイショウは手元に目を落として、ソルの視線をスルーした。

ページを繰りながらザツと内容を確認する。やはり、かなりの額の収益が発生している。支出の額もそれなりに大きかったが、赤字は発生していない。この分なら、確かに普通のバイトでは得られないほどの儲けが見込まれそうだ。

「簡単に言うと魔法生物に関する様々なことを行う部だ」

「ざっくりし過ぎですよ」

ベルの説明に容赦ない突っ込みを入れるセイショウ。

初対面から散々な扱いを受けたので、こちら猫をかぶるような遠慮は必要ないと彼は判断した。特に短い付き合いならまだしも、これから部活動を通して長い付き合いになりそうなのだから。

「すまない、どうも説明というのは苦手で……」

ベルが申し訳なさそうな顔をした。

年下であるはずのセイショウから生意気な態度をとられても、気を悪くするどころか大真面目に反省している。

(一番付き合にくいタイプだ……)

ベルを見ながらセイショウは、苦虫を噛み潰したような顔になった。冗談が通じない相手というのは慎重に対応しないと、あらぬ誤解やら要らぬ騒動やらを呼び起こす。この女性を相手にする時は言葉に気を付けようと思った。

彼女とは対照的に、そんな気遣いが全く無用に思えるのがソルだ。何でも冗談にしていまいそんな態度を見ていると、そもそもこの男は人生を真面目に生きたことがあるのだろうかと思ってしまう。

「調査、研究、保護、飼育、繁殖、討伐……まあ魔法生物に関することなら何でも、うちの部の仕事だ」

指を折りながらソルが説明する。

「魔法生物……魔物、つて略されるけどよ。その生態を研究することが主流だ。ただ作物が荒らされたり旅人が襲われたりと、魔物による被害が出ている場合は討伐を請け負う。逆に、絶滅しそうな種を保護して飼育したり、繁殖に手を貸してやつたりすることもある」

「なるほど」
頷きながらセイショウが横目でチラリと、部屋の隅で眠るもふりーなを見る。彼の視線に気づいたソルが「ああ、あれは違うぞ」と顔の前で手を振った。

「もふもふたちは神獣だからな。魔物とは違う」

「神獣……？」

留学してくる前にオートの言語と文化、風習も予備知識として仕入れてきた。この国は様々な宗教が混在しているが、オート固有のものと言え、多神教の『オルゴ教』のはずだ。

「オルゴ教では多種多様な神を祀る。神々の祠を見たことがあるか？」

セイショウが滞在している下宿のすぐ近くには、水の神を祀った

祠があつた。下宿で水汲みの手伝いを申し出た時、主人から「帰りに井戸の水を少し、祠にお供えしてくるように」と言われて立ち寄ったことがある。

「どうやら近隣の住人が使う共同井戸の守り神として祀つてあるらしいが、ござつぱりとした小さな祠だつた。」

「祠の両側に、一對の神獣の像が設置されていたらう？ あれが、もふもふともふりーなだ」

「神々と人間を仲介するもの。それが神獣であるそうだ。」

「へえ……僕、本物の神獣つて初めて見ました」

少し感動して、改めてもふりーなを眺めるセイショウ。神獣だと言われれば、その雄大さも美しさも、なるほどと納得できる。

彼の母国でも神獣という存在は居るが、実物を見たことはない。全て伝説上の生き物か、架空の生物という存在であり、神と人間を橋渡しするのは人間の神官だ。

「オートでは神獣がとても身近な存在なんですね」

「いや、そうでもないぞ？ 実際にもふもふを見たことのある人間なんて、ほんの一握りだ。滅多に姿を現さないからな」

「え、でも……」

ソルの説明を受けて不思議そうに視線を戻すと、ベルが明後日の方向を向いていた。

「ベルはオルゴ教の唯一の巫女だ。もふもふたちと意志の疎通ができるのはコイツだけなんだよ」

「セイショウが目を瞪る。」

「本来、巫女つてのはそう簡単に神獣を呼び出したりするもんじゃないんだが……この女、四六時中もふもふたちを自分の傍に置いて移動に使つたり昼寝する時の布団代わりにしてるんだ」

「……」

無言で彼女に視線を送るセイショウとソル。その圧力にいたたまれなくなつたベルが、口を尖らせて反論した。

「……奴等とは幼い頃からずっと一緒だつたのだ」

「だからって部室で飼うな！」

「私は学生なのだから仕方ないだろう！」

これもきつと、日常茶飯事な言い争いなのだろう。ソルとベルのやり取りを、生暖かい目で見つめるセイショウ。

きよるきよると周囲を見回し茶道具を見つけると、自分のための茶を入れて2人の喧嘩が終わるまで待つことにした。ついでに近くにあった茶菓子も失敬する。

コリコリと歯ごたえの良い、親指の爪ほどの大きさの焼き菓子を食べていると「くーん」と背後から声が聞こえた。

振り向くと、目を覚ましたもふりーなが床に腹這いになり、上目使いでセイショウを見つめている。どうやら菓子が欲しいらしい。

「ほら」

セイショウが菓子を放り投げると、もふりーなは嬉しそうに口を開けた。その口の大きさに比べると菓子はあまりにも小さく思えて、ちゃんと味がするのか心配になってしまう。

目を細めて喉を鳴らすも様子も可愛らしく、何度かセイショウは彼女に菓子を投げ与えてやった。

やがて茶がぬるくなった頃、喋りつかれたベルとソルがテーブルにやってきた。

「ああ、終わりましたか」

「君は環境適応能力が高いな……」

「神経が図太いとか言われないか、てめえ」

ソルの問いは無視して、セイショウは自分が座っていた椅子をベルに薦める。

「質問いいですか、ソル」

「なんだ？」

「先ほどの活動内容で、どうしてこれだけ稼ぐことが出来るんですか？」

討伐の依頼をこなして報酬をもらうこともあるだろうが、それだけでは説明がつかない。

セイシヨウの疑問に「ああ」とソルは頷いた。

「魔物から素材をとって売るんだよ」

「素材？」

「抜けた毛とか、角とか爪とか骨とか。魔法薬だけじゃなく、衣服や武具の材料になるものが多い。おまけに高値がつく。そういうのを集めておいて売るんだ」

「魔物の肉体に無駄なものは無い、という言葉まであるくらいだ」
ベルが穏やかに微笑みながら言った。

なるほどと頷くセイシヨウ。魔物が多いといわれるオートだからこそこの話だ。魔物を単なる厄介者とせず、資源の1つとして有効利用しようとする姿勢が感じられる。

先ほど触れたもふりーなの毛など、上質の絹に劣らない手触りだったし、神獣の毛という希少性も相俟って高額で売れるのではないかと……と少々怪しいことを考えながらセイシヨウが振り向いた時だった。

「ベルちゃん、居る？」

間延びした声とともに入口の戸が開けられ、ひょっこりと顔を出した人物。

「捕獲！！」

「きゃー！？」

その顔を見た瞬間、セイシヨウは現れた人物を小脇に抱えていた。「さっそく魔物ゲット！ ソル、素材の確保！」

「ええええええ」

「落ち着けセイシヨウ。どんだけ金にがっついてるんだお前は」
狼狽えるベルと呆れるソルの顔を眺めた後、セイシヨウはふっと息をついて身体の力を抜いた。

「冗談ですよ。僕だってキャットガーター族ぐらい知ってます」
抱えていた人物をそっと床に下ろし、ぼんぼんと衣服を整えてやる。

それはセイシヨウの腰ぐらいの背丈の少女で、シヨートカットの

髪に包まれた頬は丸っこく、どんぐり眼に呆然とした表情を浮かべていた。その頭には猫の耳が生えている。

なんだよ冗談かよ……と舌打ちをするソルと違い、ベルと猫耳少女はいまだシヨックで固まってしまっている。

セイシヨウは勝手に少女の手を取ると、「新入部員のセイシヨウです。よろしく」と挨拶した。

「あ……え〜と……メイです……？」

少女が自己紹介する。展開についていけず、混乱していることが分かる口調だった。

「冗談だったのか……。それにしても心臓に悪い冗談だぞ」

ようやく復活したベルが、咎めるようにセイシヨウを見つめた。

その言葉で我に返った少女が、肩をすくめるセイシヨウの顔を下から眺めながら「メツ！ ですよ〜」と頬を膨らませる。

「……」

動作も容姿も幼いが、やはり先輩なんだろうな……。

ふくれっ面を見下ろしながら、すっと指を伸ばして顎の先をくすぐってやると、メイは顔を綻ばせて喜んだ。

「メイは飼育担当だ。飼育小屋の管理をしている」

ひとしきり謝罪の意を込めて撫でてやると、メイはすっかりセイシヨウに懐いたようだ。嬉しそうに彼の手をとって頬をこすりつけている。

幼女趣味に見られないだろうかと密かにセイシヨウが心配していたら、ソルが彼女を顎で指しながら説明した。

メイは「あ！」と何かに気づいたように声を上げる。

「そうだったあ〜。ちよつと素材を集めるのが大変だから、手伝ってもらおうと思って戻ってきたの〜。セイシヨウ君、お願いできる？」

「いいですよ」

セイシヨウが頷くと、メイは「ありがとう〜。じゃあ、あのお鍋を持ってきて〜」と部屋の一角を指さした。

そこは本格的な厨房になっており、彼女が指さした先には大きな寸胴鍋が置いてある。

急に不安になったセイシヨウが「随分大きな鍋ですね。どんな素材を入れるんですか？」と尋ねると、メーイは自分の袋から油紙に包まれた塊を取り出した。

ガサガサと音を立てながら紙を広げ、中身をセイシヨウの目の前に突きつける。

「きも肝」

早くも入部したことを後悔するセイシヨウだった。

夜、下宿にて

セイシヨウは重い足を引きずって自室にたどり着くと、うつ伏せにベッドの上に倒れ込んだ。

喉の奥から低い呻き声が漏れる。だが、たとえ独り言であろうと「疲れた」とは言わない。そんなことは声に出して確認しなくていい。

彼は疲れきっていた。どちらかと言うと精神的なダメージの方が肉体の疲労を上回っていたのだけれど。

枕の上に顔だけ起こしたセイシヨウは、メイと共に過ごした数時間を思い返して顔をしかめた。

彼女に連れて行かれたのはモットの飼育小屋だった。小型で大人しいので、愛玩用として飼われることも多いポピュラーな魔法生物だ。

しかし通常は両手に乗るぐらいの大きさであるのに、飼育小屋の中に居たのは、一抱えもありそうな大きさのモットだった。

「飼育用に小型化されたものじゃなくて、ここじゃ野生のままのモットを飼ってるんだよ」

そう言っただけでメイがモットを両腕で抱え込んだ姿は、巨大なヌイグルミを抱えた幼子おさないにしか見えなくて、セイシヨウは笑いを噛み殺すために慌ててそっぽを向いた。

彼女の説明によると、野生のモットは繁殖力が強いのだが、あまり個体数が増えすぎると共食いを始めるのだという。

「だから時々、数を減らして調整してあげるの」。血が濃くならないように、外から新しいオスやメスを入れてあげることもするし」

のんびりとした口調で言いながら、無邪気な少女にしか見えない

メイが肉切り包丁を自在に操ってモットを捌く光景は………神
経が繊細な者にとってはトラウマものだろう。

セイショウとてそれほど繊細というわけではないが、これまで肉
屋が持つてくる塊り肉しか見たことのない者にとって、皮を剥いだ
瞬間の独特な臭いは、顔面蒼白になるぐらいの威力があった。

「だらしのないよお、セイショウ君」とメイに言われながら、彼女
が取り出した内臓を冷水でよく洗い、塩をふって寸動鍋に入れてい
く。ほとんどヤケクソだった。

それが終わると、今度は池に連れて行かれた。

メイが捕まえたラニアという魚型魔法生物　小さいながら肉
食で鋭利な歯を持っている　の頭を切り落とし、鱗を剥がす。

死んだ魚なら捌いたことがあるが、生きた魚、しかも凶器を持っ
た魚は初めてだ。

最初はへっぴり腰でラニアを押さえつけていたセイショウだった
が、「ラニアの鱗は高値で売れるんだよ」と教えられてから、急
にきびきびと動くようになったとメイは語っている。

全ての作業を終えた時、空は茜色に染まっていた。

ずっと同じ姿勢で、しかも「1枚の鱗も取り逃さないように」と
神経を使って作業をしていたせいで、セイショウの身体はすっかり
強張ってしまっていた。ひきつるような痛みを我慢しながら、メイ
イと共に素材を集め、部室に運び込む。ベルともふりーな、ソルの
姿は消えていた。

気づけば爪の間にはどす黒い肉片がびっしりと入り込んでいる。
何度手を洗っても取れないそれと格闘していたら、メイが小さな
両手でセイショウの手を握り、『除去』の魔法を使って汚れをすっ
かり取り除いてくれた。

顔の前に両手をかざし、裏、表とひっくり返しながら眺める。爪
も皮膚も健康的なピンク色であることを確認した後、セイショウは

ため息をついて身体を起こした。

間が悪いと言つか、今夜の下宿の夕飯は臍物スープだった。

セイシヨウは一膳飯屋いちぜんめいしやの空き部屋に間借りしており、食事は店で客に提供されるものと同じものを食べることができる。下宿の主人は大柄で不愛想な男なのだが、彼が作る料理はなかなか味が良く、いつも繁盛していた。

しかしどんなに味が良くても　しかも空腹であつたのだがセイシヨウは、今夜のスープを食べられる気がしなかった。

そんな彼に対して主人は、ムツツリとした表情のまま、手早くタマゴ粥を作ってくれた。

セイシヨウからは何も説明していないのに、このチヨイスの的確さは何なのだろうと思いつつも、ありがたく頂戴する。卵と塩と米だけのシンプルな粥は、ホツとする味がした。

腹もくちくなり、襲ってくる眠気を振り切りながら、セイシヨウはベッドから机へと移動する。やることを終えなければ寝ることは出来ない。

彼が取り出したのは、大学の授業の一覧表だった。骨ペンを手に、明日からの講義に顔を出そうかと考える。

セイシヨウは「この分野の勉強をしたい」という明確な目的があつてコセキ総合大学に来たわけではなかった。

自国での義務教育を終えた後、彼は就職した。名目上はある実業家の秘書ということになつていたが、実際は他の従業員たちと同じように様々な仕事をしなければならなかった。事業に関する専門知識を身に着け、必要な資格を取得する必要があり、仕事の合間に勉強する忙しい日々を送っていた。

ある日、かつて一緒に勉強した同級生たちと集まつた時、友人たちが口ぐちに「学生時代には戻りたくない。もう勉強なんてしたくない。勉強は嫌いだつた」と言うのを聞いて気がついた。

セイシヨウ自身は勉強が嫌いではなく、むしろ新しい知識を身に

着けることが楽しいと感じていたことを。彼も「学生時代には戻りたくない」と思っていたが、それは勉強をしたくないからではなく、叔母の庇護の下でしか生きられなかった無力な自分に戻りたくないだけだったのだ。

そのことに気づいた時、彼は、もっと多様な知識を身に着けたいと思った。自分の興味あることは何でも学んでみたいという欲に駆られた。

コセキ総合大学はどんな分野の学問であろうと分け隔てなく学ぶことができ、まさにセイショウの理想にぴったりだったのだ。

一覧表を睨みつけながら、セイショウは生物学の講義と、経済学の講義に印をつけた。

クラブ活動は予定外だったけれど、こうなった以上は徹底的に利用してやるつもりだった。

どうせ經理の仕事をするならば、講義で経済学を学び、クラブ活動でそれを応用する。魔法生物の知識もつくだろうし、今日のような経験を積めば解剖学も得意になるだろう。

セイショウは他にもいくつか講義を選んで作業を終えた。顔を出して見て、もし面白くなさそうな内容なら受講を止めればいい。他に良い授業が見つければ、途中から参加すればいい。

コセキの講義は全て「来る者拒まず、去る者負わず」のスタンスであり、この自由さもセイショウが留学を決めた理由の1つだった。

そう言えば魔法生物研究会の正式な活動時間を聞いていなかった。明日の放課後、部室に顔を出してみよう。少なくともメイは居るはずだ。本人がそう言っていたし、「セイショウ君も来てね」と熱心に言っていたから。

そこまで考えたセイショウは、叔母に手紙を書くという約束を思い出した。国を出る時に、入学初日の感想を必ず書いてよこせと念押しされていたのだ。うっかり書き忘れようものなら……あの叔母のことだ。何をやらかすか分からない。

やれやれと思いつながら羊皮紙を取り出し、文面を考える。自分がモットの内臓を洗い、ラニアを捌いたことを知ったら叔母はどう思うだろうか。恐らく「これでセイシヨウも男らしい男になれる！」と喜ぶに違いない。

その様子を思い浮かべたセイシヨウは、げんなりと脱力し……結局、手紙には無難なことだけ書いて済ますことにした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2900w/>

魔法生物研究会！

2011年10月3日03時25分発行